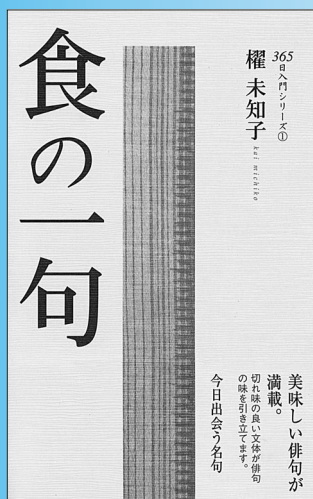


美味しい，一日一句

【評者】浦園その子 社団法人全国保健センター連合会企画部

365日入門シリーズ① 食の一句

權未知子(著)



定価 1,800 円(本体 1,714 円+税 5%)
四六判変型，240 ページ
英潮社 (Tel.03-3326-9061)

仕事をもっている、その「業界」関係者と過ごす時間がとても長い。いつの間にか、その分野特有の話し方や考え方に馴染んでいく。そのことに自覚的であるのは案外難しい。自分の、あるいは自分たちの発想が「普通」だと思って過ごしているのだけれど、外から見れば、それなりの「らしさ」が身についていたりする。もちろん「らしさ」は決して悪いわけではなくて、たとえば看護職らしさは、多くの人にとって「安心」「安らぎ」を与えてくれる。女らしさだって肯定的に使われてきた。

だけれども、である。どこかのコピーではないが、四角いアタマを丸くして発想を豊かにするには、仕事仲間とは別の人たちとのつき合いや、違った分野との出会いがとても大切なんじゃないだろうか。違った角度でものを見たり、考えたりすることで、仕事上でも意外な発見ができたりする。

で、俳句である。全国の俳句人口は 500 万人、もっと多くて 1000 万人とも言われ、相当数の人が俳句という世界—短い定型詩と親しんでいる。どこがおもしろいかわからないという人でも、知っている句をあげると言われれば、「古池や…」 「柿食へば…」 など、数句くらいは誰でも言える。

ご紹介する『食の一句』は、「食べもの」を詠み込んだ俳句を、一日一句取り上げて解説したもの。季語のある俳句(本当は季語のない俳句もあるのだけれど)だから、食べものの自体が季語であったり、行事にかかわる食の句だったり、一気に、あるいは一日一句ずつ読み進むと、「食」と四季、「食」と文化、そして俳句のおもしろさを味わえる美味しい一冊である。

著者は、現代の俳句界気鋭の俳人。豊富で含蓄のある話を平易にサラリと書いた『季語の底力』(生活人新書)で昨年の俳人協会評論新人賞を受賞した。本書も、俳句に縁がなかった人にも、親しみやすい文章で、古今の俳句を堪能できる仕掛けになっている。まずは手に取ってパラパラとめくり、目に留まった句と解説を読んでもらうのが一番かもしれない。食育の場面で、身体にいい話だけではなくて、心にいい話をするのにも、きっとたくさんのヒントをくれるはずである。

本書には掲載されていないが、著者自身の食の一句を紹介しておこう。

俳句に「見立て」という詠み方がある。目の前にあるものを別のものに見立ててみせる「遊び」の一種だと考えてもらえばいい。俳句はこの遊び心を大切にしており、文学だとか、文芸だとか肩肘張って主張するような詩形ではないと思っている。けれども、そんな「遊び」でありながら、広大な地球(世界)を感じることができたりする。

食を考える、あるいは伝えるためにも、『食の一句』が与えてくれる新鮮な味を、ぜひ味わってほしい。

南風吹くカレーライスに海と陸 權未知子

(南風[みなみ]…6月頃に吹く風。夏の訪れを知らせてくれる季語)